



Title	1730年代のパリにおけるデザインの傾向
Author(s)	野口, 榮子
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53006
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1730年代のパリにおけるデザインの傾向

野口榮子

1

1730年代のパリの美術について考えると、そこにはひとつの重要な問題が存在する。それは18世紀の美術に共通のロココ様式という名称が、曲線文様や左右非対称形のデザインが多いことに関連して用いられ、その傾向が18世紀を通して前期から後期へ展開することと密接な関係を有している。つまりロココという呼称は、18世紀の美術全般におよぶ傾向として用いることができるが、そのなかでもロココにふさわしい完成期が1730年代である。同時にロココが18世紀の後期にむかって展開する萌芽を内蔵する時期が1730年代でもあるのである。1730年代にはこのように一見して相反する二つの傾向が同時に併存している。そしてそれは美術のさまざまな分野において共通の現象であるが、とくにデザインとして、いくつかの傾向をとりだすことが可能である。

2

まず1730年代以前のパリにおけるロココ様式は、どのようにして形成されたかということについて検討しよう。いわゆるロココを、「曲線文様」や「左右非対称」的傾向とすると、その直接的な起源について、例えばキンボール (F. Kimball: The Creation of the Rococo Decorative Style, 1942) は、ルイ13世 (1601~1643) 時代にさかのぼっている。17世紀の前半である。それはイタリアの影響のもとにパリのバレ・ロワイヤルでおこなわれたものからといわれて

いる。その後にはまだルイ14世 (1638~1715) の時代が長くつづき、ヴェルサイユ宮殿の造営がおこなわれた。そして1682年からは、宮廷と政府はパリからヴェルサイユに移動したのである。1701年という18世紀の初頭に当る年には、ヴェルサイユ宮殿の「手の眼の窓の間」の天井と壁の境の部分の楕円形の窓や金地の漆喰のフリーズにロココ的な様式がみられる。しかしすべての芸術活動がヴェルサイユに移行したのではなく、パリは依然として美の宝庫であった。アラベスク文様やグロテスク文様がつくられ、それらは初期のロココの主流となる様式であった。

1715年にルイ14世が没した後に摂政時代がはじまり、1723年までつづいた。王位継承者であるルイ15世 (1710~1774) が5才であったため、ルイ14世の甥のオルレアン公フィリップ (1674~1723) が摂政となったのである。そして1715年から1722年まで宮廷と政府は再びパリへ戻り、その間にイタリアから帰国したジル・マリー・オップノール (1639~1742) によるバレ・ロワイヤルの左右非対称の内装などの華やかなデザインがおこなわれた。

1723年にヴェルサイユ宮殿で摂政オルレアン公が急死するとルイ15世の時代となり、1725年には新王の結婚式、1727年には双生児の王女の誕生などがあった。パリではオップノールとともに、ジュスト・オーレール・メッソニエ (1695~1750) が銀器や宮内装飾、装飾デザインをおこなった。

それらはピトレスクとよばれた。彼はルイ15世の結婚式にさいしても多くのデザインをまかされている。さらにメッソニエは1726年にパリのサン・シュルピス教会の正面の改築のデザインの原案を、奇妙な流れるような線の外観でつくった。曲線の多い、左右非対称形のロココ様式は頂点に達しようとしていたのである。

3

1730年代にはポーランド継承戦争（1733～35）があるが、ルイ15世の体制は次第に定着して、次々と王女や皇太子が誕生し、1739年には長女の結婚式が華やかにおこなわれた。ヴェルサイユ宮殿ではロココ様式の内部改装がつづき、ルイ15世様式とよばれる猫足の曲線の多い家具も登場した。パリではロココ建築の代表といわれるスーピーズ館が、ジェルマン・ボフラン（1667～1754）の室内装飾により、1735年から40年にかけて造営された。二階の楕円形の室内にはパネルと鏡が縦に交互に配置され、天井に向って浮彫のブシケが舞い上っていく夢のような情景が現出している。1734年にはメッソニエの最初のデザイン集も出ている。

しかし同時にすでに1732年には、パリのサン・シュルピス教会の正面の改築デザインは、メッソニエの原案が不採用となり、ジャン・ニコラ・セルヴァンドニ（1695～1766）というイタリア出身の建築家の新古典主義的な設計が採用されることになった。1737年にはヘルクラネウムの発掘がおこなわれ、やがて1748年にはポンペイも発掘されて、古代への関心が増大するが、ヘルクラネウムより5年前にセルヴァンドニの列柱の多い古代風のデザインが勝利を占めた。

教会という性格からロココ様式一般の適用がふさわしくないと判断されたと理解することもできるが、フランス人の好みの中に常に底流として認められる古典趣味が、ここで表面にあらわれたのである。そのことは、1730年代以前のロココ風にたいする批判と反省をふくんでいると考えることもできよう。そして1739年のルイ15世の長女の結婚式にさいしても、セルヴァンドニがセーヌ河の「花火の殿堂」や「音楽堂」の設計をおこなっている。

1730年代には、このように1730年以前の華麗な結実と、それにたいする反動とも考えられる新古典主義的傾向が共存していた。1730年以降には、1750年までにオップノールやメッソニエなどの死、1752年にはシャルル・ニコラ・コシャンによるメッソニエ批判などがあらわれ、ロココはその優美さの中に古典の様相を加える。しかしそれは決してロココにとってのマイナスではなく、1745年に宮廷に登場したポンパドゥール夫人（1721～1764）の時代の好みを反映し、よりいっそうロココを展開させ、生命を与えることになったと言える。1730年代は、そのような局面を内蔵するロココ様式にとって重要な時期であったことを改めて強調したい。

のぐち・えいこ 関西学院大学
1991. 11 第33回大会